
彼女

海山ヒロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼女

【Zコード】

N6097S

【作者名】

海山ヒロ

【あらすじ】

ナカイマリ。

二年前からの隣人。

一年と九ヶ月前からの飲み友達。

文学部フランス語フランス文学科の一回生で、ぼくと同い年。

特別美人なわけでもスタイルがよい訳でもなく、口は悪いし気は強い。

そんな彼女を、ぼくは好きなのです。

「いらっしゃい」
入り口の扉のきしむ音がして、顔をあげたマスターのトオルさんが、笑顔でそう言つた。

「こんばんは」

少し低めの甘い声。

風が、店内へ夜氣を運んでくる。

「すこし遅かったな」

振り返らずにそう言つたぼくに答えるよつて、白い小さめの手が後ろから伸びてきて、カウンターのグラスを掠め取つた。

「あーっ！ 口つけたばっかなんだぞ！」

白い喉を思い切りよくそらせ、「クククク」と二度鳴らして彼女がぼくのビールを飲み干す。

「じょうじょうさま。今日は忙しかったから喉が渴いちゃって」

唇にのじる泡を人差し指でぬぐい、にこりと笑う。

ぼくはグラスに残つた泡が空しく消えていくのを眺めるしかなかつた。

「今日も、だろ？お前もあんな忙しい店、よく続くよなあ」

この店での定位置であるカウンター端のスツールに腰かける彼女をちらりとみた。

あどけなさの残る目もとや意外にしつかりした肩口に、すこし疲れがのぞいてる。

「ひんぼー学生ですからね」

彼女の言葉に、ぼくらの前でシェイカーを振つていたトオルさんが、ふきだした。

「の、割りには三日とあけずに来てくれるよな、マリちゃん」

「トオルさんのお酒はおいしいから。わたし、ここ以外には行かないし」

「これからもよろしく」

目尻にしわを浮かべて、トオルさんが笑う。
ほの暗いショットバー。

低く、かすかに流れる歌声。

今日はトオルさんの好きなアリアだろうか。

「ナリくん、今日はなにを撮つたの？」

ギネスビールを注ぎながら、マリが小首をかしげて聞いてきた。
セミロングの髪が、さらりと揺れる。

「ナリくん？」

すこし紅すぎるほつてりとした唇が、ぼくの名を呼ぶ。

「これおじるから飲んでよ」

ギネスの太い瓶を、音をたてずにカウンターの上ですべらせ、くるくるとよく動く大きな瞳が、上目づかいにぼくを見る。

「ナリくん？」

「じゃ、遠慮なく」

ナカイマリ。

二年前からの隣人。

一年と九ヶ月前からの飲み友達。

文学部フランス語フランス文学科の一回生で、ぼくと同じ年。
特別美人なわけでもスタイルがよい訳でもなく、口は悪いし気は強い。

強いてい。

それが、ぼくの好きな彼女だ。

「いらっしゃいませ」

いつものセリフに迎えられ、なに気なく顔をあげたぼくは、少々面食らってしまった。

いつもはほの闇に紛れてしまつくらいにしか客のいないこの店に、人があふれていたからだ。

「今日、なんかありましたつけ？」

ぼくの定位位置、カウンターの奥から2番目に腰をおろし、トオルさんにギネスピールを頼んだ。

「いいや。金曜日つていうのもあるだろ? けど、たまには混んでる日もないとね」

いつも通りのんびり笑っている。店の経営者としては人が多い方がそりや良いだろう。

店内をみまわしてみる。カウンターは、となりをのぞいてすべて埋まっている。五つしかないテーブル席は一杯だ。しかも、よく見れば店を埋めているのは、ほとんどが男女一人連れ。

金曜日の夜。ジャズがゆったりと流れるほの暗いショットバー。

「ティーとにはもってこいの場所だな」

ギネスをなめつづぼくは独り、苦笑した。

額を寄せ合いひそひそと低い声でささやく男と女。

「ひとり者には田の毒ですね」

ぼやくと、前でグラスを磨いていたトオルさんが微笑した。トオルさんは、グラスを傷つけるから指輪はつけていないが、奥さんと娘さんの写真をカウンターの中に飾っているのを、ぼくは知っている。

「……マリでもいいやいんだけどな」

思わずこぼれた言葉に、通りがかりのバイトの原口くんが、「彼女なら来てますよ。ほら」

入り口近くのテーブルを指した。つられてそちらを見る。いた。

「……へえ。今日は女っぽい格好してるじゃないか」

つぶやき、ぼくはすぐ視線をはずした。

「マリも今日は彼氏連れか

「いいですねえ」

原口くんはのんきにグラスを洗いながらあいづちを打つ。

「原口君。一番テーブルにこれ持つてってくれるかい?」

「あ、はい」

いつの間に用意したのか、トオルさんがアイスペールを彼に差し出し、原口氏は退場。

「……ギネスかい？」

グラスを拭く手元を見たまま、トオルさんがきいた。マリが来ていると原口くんが言つたとき、その顔が微妙に曇つた気がする。

しまつた、とでも言つみつひ。

「×××、お願ひします」

ギネスがすこし残つた、背の低いグラスを押しやる。

この店の照明は暗い。あっちのテーブルとぼくのいるカウンターでは端と端で離れ、ひとの顔などほとんど見えないはずだ。ぼくだって、ほんのチラッとしか見てないし。

「どうぞ」

目の前に置かれた透明なカクテルを、ひと息で半分以上、喉の奥に流し込んだ。

喉に冷たさをかんじた瞬間、胃の腑が燃えるよつて熱くなつてきた。

マリが、テーブル席についているのを初めてみた。男連れなのも。酔いが、急速に下から上へと伝わってくる。こめかみのあたりが、鼓動にあわせて脈打つていて。

セミロングの髪が、ほの暗い照明の中、妙に艶めいてみえた。

もうひと口、飲み下す。

いつもより濃いめにぬられた唇が、なにかさわやかっていた。彼女の前には、男の広い背中があつた。

もうひとつ。今度は喉元から酔いがひろがる。

男の左手には、KOOの箱があつた。

こめかみの鼓動と呼応するかのように、頭の中で、さつきみた光景がフラッシュバックする。

珍しくタイトスカート。ヒールのあるパンプス。グラスを持つ彼女の白い手には、指輪が光っていた。

ドクンッ、ドクンッ。

耳の中にまで鼓動が響いている。「ひるせい。

彼女と男の間に置かれた灰皿には、吸い殻が山となりかけていた。

ドクンッ、ドクンッ！

まるで周囲とくぎるよつに、ふたりの周りには、煙の霧がたちこめていた。

ズキン、ズキン。

鼓動が痛みに変化する。

「……煙草は嫌いじゃなかつたのかよ
煙のむじつには、彼女の笑顔があつた。

「いらっしゃい」

「あれーナリくん」

店に入った途端、カウンターから声があがつた。

見れば、マリが大きな目を輝かせて手を振っている。

「ギネスお願いします」

注文と同時に、トオルさんはギネスの小瓶とグラスをカウンターに置いてくれた。

「ナリくんとこじで会うの、久しぶりだね」

伸びてきたトオルさんの手を制して、マリがビールを注いでくれる。

彼女の前には相変わらずの赤い色、プラティーマリーが置いてあつた。

「 - そうか?」

「うん。一ヶ月ぶりくらいじゃない?」

「……撮影が立て込んでたからな」

ぼくはしなくてもいい言い訳をしていく。

「大変だねえ」

屈託なく笑う、マリ。

撮影はたしかに多かつた。アルバイトでやっているカメラマン助手（ようするにただの雑用）の仕事で、この頃連日朝帰りだった。ぼくの雇い主、「師匠」は、6歳上の兄貴の先輩で、新初人とう。なにやらおめでたい名前だが、本名だそうだ。年は、知らない。バイトのない日は大学の課題におわれ、講義が終わればアパートに帰り、コンビニ弁当やカツラーメンを片手に図面をひいていた。ぼくの選考は都市建築で、製図はもちろん、大学を設計した教授の指導（趣味？）により、校舎のあちこち、近所の病院に幼稚園、はてはゼミ行きつけの居酒屋まで測量したりする。

「人間がより快適に生きるために建築はある」という彼の持論におされ、住環境がひとに与える影響を学ぶために心理学の講義もついている。そしてもちろん、その課題も、机の上を占領している。アルバイトと大学の勉強で、ぼくの学生生活はそこらのサラリーマンよりも過密なスケジュールだと思う。このご時勢では幸運にも仕送りだけでやつていけるのだから、時折、大学だけに専念しようとも考える。けれど。

なにもない空間に自分の思い描くモノをつくりあげる建築と、すでにあるモノを自分の中へいつたん取り込み、再創造する写真。なにかをつくる、表現するところの2つの手段は、ぼくをずっと虜にして離さないのだ。

マリをのぞいては。

この一ヶ月、またあの光景を見てしまつかもしれないと、ぼくはこの店に来ることが出来なかつたのだ。

「ねえナリくん」

「……なに」

物思いに沈むぼくなどまつたく氣にせず、マリが肩をつづいてきた。

「ナリくんはね、死ぬ時になか残す? 遺言とか、遺書とか?」

「……なんの話だ?」

彼女の話はいつも唐突にはじまる。

「ほら、この前アメリカで猫に全財産を残したひといたでしょう? トオルさんといまその話をしてたんだ」

彼女の言葉をうけて、トオルさんがカウンターの下から数日前の新聞を見せてくれた。

先月突然亡くなつた米建設業界の大立者であるR氏の遺言書がこのほど発表され、大株主であった複数の企業の株式を除く全財産(推定数兆ドル)をたつた一匹の飼い猫に遺した
海外面のトップには、お世辞にもかわいいとは思えない太つた白猫とその記事が踊つていた。

「ああ、これが。……確かワイヤードショ―でも騒いでたな。で?これがなんだって?」

「JのRさんは、この子がかわいくてしょうがないから、自分が遺せるものをこしたんだよねえ?」

マリは、考える時の癖である人差し指を軽くあごにつけ、ビニともない空間をみつめる動作をしている。

「わたしは猫じゃないから分からぬけど……その猫は嬉しいのかな?それにこのひとはそれで『彼女』が喜ぶと思つていたのかな? やれやれ。どうやらまた始まつたらしく。」

彼女がぼくの住むアパートの隣りに引っ越してきて、このバーで偶然会つて以来、ぼくらは一緒に呑むようになつた。

彼女の酒は湿っぽくも、説教くさくもないよい酒なのだが、呑むほどに饒舌になつてゆくのだ。昨日読んだ本について。ある友人の話。新聞のテレビの政治面から死亡欄に、帶び広告。さては近所のおばさんから聞いた話まで、良くなここまで話題があるものだと呆れるより感心してしまつほど、酒ですべらかになつた唇と舌は、世間のさまざま事柄にふれ、「解説」してゆくのだ。

いつの頃からか。彼女が話し、ぼくが聞くという形が出来上がつていた。

「ねえナリくん?」

「……さてね。他にできることがなかつたんだる。このおっさんに子供や親類がいたようだけど、金を遣したいような相手じやなかつた。この『テブ猫だけがあつさんにとって恋人や家族みたいに大事で、その『恋猫』がこれから困らないようにしたかつたんじゃないか?」

「彼女は嬉しいのかな?彼女が仮に人間だつたとしても

「もらえるモノは、もらつとけばいいだろ」

ぼくのグラスは空になつていて。

彼女のグラスは、まだ半分以上が赤い液体で満たされていた。

それをひといきで飲んで、マリがさらに質問を続けた。

「ナリくんならセ、いやな例えだけどだれか大切なひとが亡くなつた時、遺産として何か遺してもらつて、嬉しい?」

それこそ猫の目みたいに色の変わる瞳が、ぼくを見ている。こんな風に……じつと見つめてくる彼女の瞳は、とても綺麗だと思つ。底のそこまで澄んだ、覗くものすべてをひきこむ泉のようだ。

「その時になつてみないと、なんとも言えなーいな……」さりげなくその瞳から視線をはずし、ぼくはしばし考えた

「誰かが死んだことでなにかを得るってのは、好きじゃないな……。遺されたものは受け取るだらうけどー嬉しい……わけじゃないな」

マリがおおきへ頷いた。

「だよね？自分を思っててくれたその気持ちは嬉しいだろ？物とか形のあるものはいつまでも残るし、そこに価値がある気がするけれど、『思いでの品』ってなかなか辛いこともあるよね」

「クリと喉をならしてカクテルを飲む。
さて。ここからが本題です。もし逆の立場に……ナリくんが遺す
側になつた時、なにかのこしますか?」

またあの瞳が、ぼくを覗む。

「この瞳に出会つたび、ぼくは田を逸らしてしまつ。
美しい瞳だ。だけどその瞳は、ぼくが隠したいと無意識に願うものまでうつしてしまいそうで、いつも自分から逸らしてしまつ。

今夜も、また。

「たぶん遺す」

なにを？何故？」

「何がなんて分かるか。……お前はどいつもなんだよ?」

切り返しの鋭さと瞳で、ギヤギヤしていった。まへせ、なんとなへ海しきなつて逆襲してみた。

「わたしは、遺さない」

あらかじめ用意してあつたのか、間髪入れずにきつぱりと言い切

१०

「なんで遺すの？」

泉のように透明だつた瞳に、挑戦的な色が浮かんでいる。
ぼくを惑わす。

「何故か……。俺が死んでも、モノがなにかが残れば俺がいた証になるから……かな」

言葉がするするでてきた。そんな事、今まで考えたこともなかつたのに。

「証？」

鋭い声。なんだか追い込まれて行くような気になる。

『遺言なんてのは、言ってみりや自分が死んだ後でもひとに影響を与えていいから、残すんじゃないのか？』

自分でも弁解じみてきこえるほどの答へこ、マリがふいと視線をはずした。

なにかを見極めるよう丁寧に細められた田が、虚空をたらさんでこる。

「わたしがもし遺言をのこすとしたら、こう書く。

『忘れて。わたしがしたこと、話したことを、わたしがこの世にいたことそのものを、忘れて。わたしが死んだいまこの瞬間から。お墓なんていらない。死体は灰にして、海や川、野にでもまけばいい。お願ひだから、わたしのことを、絶対に思い出したりしないで』

時とともに忘れ去られ、『あの人はいいひとだった』なんて、時折思い出したように言われて。悲しくもないのにその場の雰囲気で泣かれるなんて絶対に嫌。

ひとの記憶なんて、時間がたてばうすれてゆく。それは当たり前だからいいの。でも、いつか忘れられるくらいなら、最初からなにもない方がいい。それにね

口をはさむ隙を与えず、彼女が続ける。

ぼくはただ、その良く動くつややかな唇をみていた。『証？自分生きた証をのこしてどうなるの？誰かの記憶の片隅に思い出として残つて、なんになるの？

思い出でしかなく、死んだ瞬間にそのひとのすべては終わるの』

残したかつた思い出もやがて消えてしまって、ものだけ、言葉だけのこるなんて、空しいと思わない?」

そう言い放つたマリは、口の片端だけあげ、皮肉いっぱいの表情を浮かべていた。

その顔は、必死になつてなにかを残そとじしている人々を、笑つているようにみえた。

「……お前のその理屈だと、建築とか芸術そのものが空しくなつてくるな……」

反論めいた言葉をかえしながらも、ぼくはなんだか、とても悲しくなつてきた。

彼女の一見ストイックな、排他的ですらあるその言葉の中に、「忘れないで」という切望を感じてしまったから。

忘れられるなんて、耐えられない。それなら初めから、なにもなしにして……。

彼女のものすじく脆い部分をみてしまった気がして、ぼくは罪悪感を覚えてしまった。

マリの横顔を、ちらりと盗み見た。

なにを考えているのか、その横顔は店のほのぐらしの灯りの中でにじんで見えた。

強がりばかりいつまつ。彼女自身は、そのじとじとづいてこるのでどうか。

そしてあの男　ＫＯＯＬ煙草の男は、そんな彼女の脆さを分かつているのだろうか。

「「ううそつせま」

満足げな笑顔とともに、本日最後のお客が帰つていった。
「はあ～。今日も疲れましたねえ」

深々と礼をしたあとほっと息をついたマリに、後輩バイトの由紀が大仰なため息をついてみせた。

「そうだね。今日はお客様さん、少し多かったね」

マリは卓上のタバスコや胡椒の容器を集めながら答える。

その言葉に、由紀は思いきり顔をしかめてみせた。

「少しじゃないですよー。『お待け』のお客様が、あっちの方まで列つくつてたじやないですかあ」

由紀のミニウインナーのように短い指が、店の出入口から5メートル先の雑貨屋をさす。

「甘いね由紀ちゃん。わたしが入つた頃なんて、あっちの方まで列がつづいてたもの」

笑つてさらに数メートル先をマリがさすと、由紀はすっとんきょうな声をあげた。

「ホントですかー？」

アイメイクを駆使して大きくした目を、それこそめいつぱい見開いている。

オフィス街に程近いショッピングモールの、イタリアンレストラン。それが、マリのアルバイト先である。店員五十名程度の店内は、シンプルかつシックな内装で、仕事帰りにスースーできても、遊び途中にジーンズで立ち寄つてもはまる、カジュアルな雰囲気。ランチで千五百円以上からと値段はそこそこ高いが、デザートの種類が豊富なのと、雑誌に何度も紹介されているお陰で、二十代から三十代の女性たちに、絶大な人気があるようだ。

マリは今まで、暇な日というのを経験したことがない。後輩の

由紀にも言つたとおり、彼女がここでバイトをはじめた当初は複数の女性向け雑誌に「穴場発見！おしゃれランチはここしかない！」などと紹介されたばかりで、雑誌を手にした制服やスーツ姿の女性客でごつた返していた。最初の数週間マリは、ただ先輩たちに言われるままに、テーブルと厨房を行きつもどりつしていただけだった。「さて片付け片づけっと」

その言葉を合図に、由紀たち後輩も片付けを始めた。

いまやマリも「リーダー」と呼ばれるバイトの統括係りになつている。新人が入つてくれればイロハを教えねばならないし、自分の分はもちろん、他のバイトがとつた注文も把握しておかねばならない。店長はもちろんいるし、社員も常に一名以上いるが、レジ打ちもし、時折いらっしゃる嫌なお客の前で後輩がトチれば、飛んでいって一緒に平謝りすることもある。社員並の責任と義務を求められていると、重荷に感じることもある。

だがマリは、この仕事が好きだつた。

すべて自分でやつた方がよほどスムーズに動けるし、精神的にも楽だが、最近は新人に仕事をふることも覚えた。途切れることなく来店するお客様に対応し、汗だくになりながらも大過なく一日を終えた日は、晴れ晴れとした気分になる。もともと机にむかって何かするよりも体を動かしひとと接することが好きだつたが、この店は時給の高さで選んだのだ。入りたての頃、時給と仕事の大変さをはかりにかけて、辞めようかと思ったことが何度もある。

いまは、ここより時給の高いバイトとでも、かえたいとは思わない。自分の自由になる金のため、さらにはバイトそのものの興味からはじめた仕事で、大学の講義をおろそかにするつもりは毛頭ないが、ここでの「仕事」も、いまでは大切な生活の一部になつていた。

「お疲れさん」

店長の小西が、店の奥からレジ集計を終えてでてきた。

「あ、店長。お疲れさまです」

ペ「リと頭をさげたマリに、小西はもはや地顔になってしまった
いるらしい営業スマイルを見せ、「

「マリちゃん。悪いけどこれ、うえの方まで届けてくれないかな？」
A4サイズの茶封筒をポンとよこした。中には書類でも入つて
るのだろう、すこし厚みがある。

「はい、事務所へですね」

マリはそこへ、前にも使いに行つていた。

「そう。悪いね。ぼくは電話を待たなきやならないんだ。まだあつ
ちには誰か残つてるはずだから」

「分かりました」

小西はもう一度悪いねを繰り返し、奥へと戻つていった。

「由紀ちゃん、わたくしちょっとお使いに行つてくるから、あと頼め
る？」

近くにいた後輩の由紀ににそつ音こおへと、マリは店をあとにした。

「失礼します。レストラン『ANAINS』のものですが」

蛍光灯に照らされた室内に、声が空しく響いた。

マリは、それでも一息つくと、静まり返つたオフィスを見回して
みた。

ショッピングモールの終業は八時。だがレストランフロアは十時
まで営業しており、最上階にある駐車場は十時半まで開いている。
モールを運営する事務所もそれにあわせて人が残つて居るはずだが
……。

「すみません、どなたがおられませんか……？」

無駄かなと思いつつ、マリは先程より大きめの声をだし、もう一
度呼びかけてみた。

電気だけが煌々とついた無人のオフィスは不気味だ。ただでさえ
レストランのある四階から事務所のある七階まで、やたら靴音のひ
びく従業員用通路をとおつて、うすら寒い思いをしてきたのである。

「……いませんよねー……？」

だんだん小声になりながら、マリは後ずさりをしていた。と、

「中井」

後ろでこきなり声がした。

悲鳴を飲み込み、さつと振り向くと、廊下の奥の小部屋から、口一ヒーカップを手にした男がしてきた。

「 ッ田崎さん！驚かさないでくださいー！」

「お前が勝手に驚いたんだる」

軽くにらみつけるマリに、口一ヒーカップの男、田崎は悪びれずに答える。

「飲むか？」

田崎がでてきた小部屋は、給湯室のようだ。田崎の白い大きな手に握られたマグカップからは湯気がたつている。

「ありがたいお申し出ですが、仕事中ですのでの

マリの答えに、田崎がちいさく笑う。

「あいかわらず真面目だな。その真面目な中井さんが、仕事をほり出してなんの御用でしょ？」「わざとらしく腕をあげて時計をけりうつと見る。

「店長からのお届けものです」

マリは、その手に茶封筒を押し付けてやった。

田崎はそれを片手で受け取ると、そのままスタスタと部屋へ入っていいく。自然マリもその後について行った。

「ま、座れよ」

田崎がどこやらから引っ張つてきてくれた椅子にあわへしきかけたマリだが、目の前の、自分の席に落ち着いた田崎の仕草におもわず笑つてしまつた。

「すこしは控えるんじゃなかつたんですか？」

左手で珈琲をすりながら右手で胸ポケットを探る田崎に黙つてみると。

「だれがそんなこと言つた？」

KOO」と箱をななめによぎるロゴ。白地に緑の縁取りがされた箱の端をかるくたたき、一本取り出す。

「まそろに吸つて吐く煙の向こうで、『オフィス内禁煙…』の張り紙が、すっかり黄色く変色していた。

「ふん。こりや明日だな」

田崎がくわえ煙草で封筒から何枚か紙を出してめくつた後、つぶやいた。

「……今夜も残業ですか？」

周囲の席に点在するパソコンの電源はすべて切られ、静かなオフィスにはマリ達以外のひとの気配がない。

「まあな

「所長さんなのに大変ですね」

田崎は、マリのその言葉におおげさなため息をついてみせた。

「ばか者。中間管理職つてのが、一番残業するんだぞ。いまの若いやつは定時でさつと帰るしな」

いやに実感のこもったその言ご方に、マリは声をあげて笑つてしまつた。

「その発言、『オヤジ』ですよー。田崎さんまだ三十一でしょ? 田の前に座るこの色丘の男。名を、田崎雅也といつ。三十一歳。このモールを管理する事務所の所長をしている。モールチーンの本社から出向してきたと聞いたことがあるが、この年齢で所長になるくらいだから、かなりのやり手なのだろう。柔軟な顔とのんきな軽口からは、彼がぱりぱり仕事をこなしている姿など、マリには想像できないが。

最初にこの事務所へ使いに来た時。マリは入り口ちかくに突つ立つていた田崎に、

「すみません、所長さんおられますか? とたずねてしまった。

すこし困ったような表情を浮かべる田崎の横で、制服を着た年配の女性がぷつと吹きだし、

「所長、お客様ですよ」

マリの田の前にいた田崎を読んだのだった。

「恥ずかしかったなあ、あの時は……」

「何が?」

マリのつぶやきに、田崎が不思議そうに聞きかえす。

「いえ別に」

赤くなつた頬をかくすよつて手を顔の前でふり、マリは勢いよく立ち上がつた。

椅子がギイッと鳴る。

「御仕事お疲れさまです。わたしはまだ店の片付けが残つておりますので、これで」

「明日、何限からだ?」

照れ隠しの早口を、笑顔でささぎられた。

「は?……一限から……ですけど……?」

あ、「をひき気味にしてこたえるマリの言葉に、田崎の笑顔が大きくなる。

「よし。一杯だけつきあえ」

言つなり机の上の書類を引き出しこぼうり込みはじめる。

「へ?あの、田崎さん……?」

あわてるマリを尻目に片付けをおえた田崎は立ち上がり、大股で出口へ。その足取りはどこまでも軽い。

「あの、田崎さん?急に言われましても、片付けもまだ」

「いま何時だ?」

追いすがつて言いつのむマリの前に、腕時計をはめた左手が差し出される。

その腕も、見ほれるほど白い。

「……十時一十分、です」

「お前いつも十五分頃には片付け終えて、着替えてるよな?」

最終点検とでも言つように、ぐるりとオフィスを見渡しながらそういうこう田崎に、マリは頷くしかな。

確かに、いまから店にもどっても、由紀たちバイトは帰った後だらう。もちろんマリが帰つてこないので、店長に厨房の片付けをしているキッチンスタッフ数人くらいは残つているかもしれないが。鼻歌まじりに歩く田崎に、マリは仕方なくついて行つた。なんだかうまくはめられているようで悔しい。

レストランのある四階で、ふたりだけを乗せたエレベーターがとまりた。

無言で降りようとするマリの背中に、田崎のすこし不満げな声がとどいた。

「なんだお前、俺と飲むのがそんなに嫌なのかな？」

「違いますよ！」

あわてて振り向いたマリに、満面の笑顔。ヤラレタ。

「じゃ、下で」

得意そうな顔が、扉に向こうて消えた。

「また引っかかった……」

ため息とともにそうつぶやいたマリだが、

「仕方ないか

クルリときびすを返し、駆け出した。

その足取りは、はねるみづて軽やかだった。

4 (前書き)

ずっと放置していました。

もじね待ちのかたがおられたら、すみません。

ものがたり自体はブログで完結掲載済みです。

こちらでも順次掲載していきます。

「お疲れさまでした！いまから昼休憩でーすッ。午後は天気の具合みますが、一応2時からですんで、ヨロシクッ」

進行係のバイトくんが、メガホンを通さずとも聴こえそうな大声でそう宣言すると、だれもがホッと息をつき、三々五々散つていった。

すこし歩けば有名な中華街があるこの港ちかくの公園には、早朝から数台のライトバンが停車し、大小さまざまな機材と大勢の人間が広い園内を移動していた。

木陰に停めた車からもゆらりと陽炎が立ちのぼりそうな真夏日にもかかわらず、その中の背の高い何人かは、分厚いコートやセーターを着込んでいた。

「午後も晴れますかね？」

ぼくはすこし雲のでてきた空をみあげ、持っていたレフ版をおろしてかたわらの新さん、ぼくの師匠で本日の主役、カメラマンにきいた。

「さてな。すこし曇つてくれたほうが、こつちは助かる」

撮影中ずっとのぞき込んでいたファインダーから顔をあげ、彼はおおきく伸びをした。

早朝からの撮影でもともと浅黒い顔が真夏の太陽に焼かれ、黒光りしている。

「あちーなしがし。オイ、ナル。悪いけどなんか冷たいもん買つて
きてくれ」

新さんは額を伝づ汗をシャツの袖で無造作にぬぐつと、ジーンズのポケットから財布を抜き、投げてよこした。

「アイスでいいですか？」

さう聞くぼくのTシャツも、絞れるくらいの汗でじつとつ濡れ、背中にはついている。

「おひ。お前のも置つてここよ。俺のは

『『ゲロ甘な』やつですね

ぼくの答えに新さんは満足げに頷いた。

屋外の撮影が多いせいか、常に浅黒い肌。身長は178のぼくと目線が同じ。でもシャツの上からでもわかるその胸板の厚さは、普通じゃない。ぼくの倍くらいはありそうだ。短く刈り込んだ黒髪にそげた頬。切れ長の三田眼はいつも濃いサングラスで隠され、その太い眉はあくまで厳つく……。

そんな硬派なみかけとは裏腹に、彼はそうとうな甘党なのである。撮影の後よくおひつてもらんだが、それが焼き肉であろうと鮓であろうと、必ずデザートを頼む。しかもぼくなじは見るだけで胸焼けしそうな特大のチョコレートパフェやイチゴショートケーキを、その時はサングラスをはずして皿を細めながら実際に幸せそうに食べるのである。

いつだつたか居酒屋でデザートが品切れになっていた時など、きりきりと音がするくらいにその太い眉をよせるや、足音高くその店

をあとでじて「ノンビリ」と走った。

夜中の一時だった。

「暑い……」

アスファルトの照り返しを受けながら、ぼくは徒歩百メートル先のコンビニに向かった。

ふと振り仰ぐと、まっしろな入道雲が道路の左右に林立するビルを覆いつぶすよう、「ぼっかりと空にうかんでいた。

真つ青な空。

雲の白。

ビルの窓ガラスの銀色。

この三色がふりそそぐ太陽のひかりに縁取られ、強烈なコントラストを描いていた。

「アチ」

口からは熱い息といつしょにそれしか出でこない。影を選んで歩いても、体中から汗がふきだしあいを伝い、したり落ちる。撮影中はまつたく気にならなかつた蝉の声がいまは耳にまとわりついて、暑さをいつそう感じさせた。

午後一時になろうとしていた。

木々の影は短く、濃い。道行くひとどもぼくとおなじように暑さのぼせ、ふらふらと、それこそ立ちのぼる陽炎のようによらいでみえる。

でも。

「この炎天下、モデルたちは撮影中、汗ひとつかいていなかつた。

今回は雑誌のグラビア撮影とかでモデルも大勢いて、モデルを「のせる」ために音楽なんかもかけてずいぶん騒がしくしているのに、なにかこう……ピンと張り詰めた空氣があたりにただよつていた。真夏の、体中をとりかこむ湿つた大氣の中。モデルたちは凜然とたたずんでいた。季節を先取りするファッショングラビア雑誌の撮影らしく、厚手のセーターや革のコートを身につけていたのに。ただそこにあるだけで、確実に肌を焦がす太陽など存在しないかのように。カメラマンの新さんが「北風が吹いてきた」と言えばコートの前をかきあわせ、「寒いからこそ寄りそつんだろー?」と言えば、こんな時期ふれるのも嫌になる毛皮のコートにふたりでくるまり、頬を寄せ合つていた。

待ち時間には、クーラーを寒いくらいにきかせた車内にこもり、忙しげに団扇であおいでは汗もができると騒ぐか、長々とマグロのよう横たわつていてのとおなじ人間だとは思えなかつた。

プロとは、すごいものだ。

グラビアは苦手なんだよと、撮影直前までぼやいていた新さんも、流れる汗を拭いもせずファインダーをのぞき込み、レフ版を持つぼくを時折どやしつけ、シャツターを切りつづけた。

あの時、彼のファインダーの中での空間は、確かに冴えた陽に照らされた、木枯らし吹く都会の、冬だった。

「お待たせですか」

「コンビにから戻ると、新さんは園内のあるまやでひと眠りしているところだった。

ぼくの声に顔をあげたが、その皿まきの右手の皿こコンビ一袋へと熱く注がれている。

「みるく金時とリッヂバニラ、どっちがいいですか？」

「両方」

すでにじつい手は袋へとのびている。

「絶対そいつ言ひました」

自分で用のかちわり氷を、新さんが大事そつに握りしめる袋からだした。

新さんは 幸せそうに両手にみるく金時とリッヂバニラを持ち、見比べ、しばし逡巡し、やがて大きく頷くと、リッヂバニラを食べはじめた。

もちろん、みるく金時はクーラーボックスで厳重に保管される。カメラに向かうときよりも真剣そうなその表情に、ぼくは背をむけて笑いをこらえた。

「見物人が出できましたね」

近隣の会社員だろうか。制服姿のOさんや、クールビズはどこのやう。この暑さでもきつちりネクタイをしめたサラリーマンが、機材や、ぼくらと同じくあずまやでくつろぐモデルたちをちらちら

眺めながら通り過ぎていく。立ち止まって見ていくひともいる。

「やっぱり珍しいんですかね」

「どううな

アイスに没頭していると思っていたが、新さんはあいづちを打つてくれた。

手にはいつの間にか、みるく金時が握られていたけれど。

眼を見物人へと戻し、ぼくも彼らを見物することにした。

ほとんどは、ワイシャツ・スーツ姿のサラリーマンと、ベストにタイトスカートの制服を着たOJさん。この公園のまわりには、市役所に新聞社、たしか、大手家電メーカーの本社ビルもあった気がする。暇なのか、珍しいからか。暑いのに彼らは立ち止まつたまま、ボンヤリこちらを見ている。

ふと、気がついた。

大学生のぼくはいま夏休みの真っ最中だが、もうあのサラリーマンたちにはそんなものないのだ。夏になろうが冬になろうが、学生のように「力用におよぶ」「休み」は存在しない。いまはバイトに勤しむぼくだって、再来年、いや来年三回生なれば「就活」とやらを始めねばならない。いわゆるリクルートスーツを着て、会社訪問、OB訪問などで歩き回るのが。

あの中にはいる為什麼に？

制服姿のOJたちは遠くにいるせいか、皆おなじ顔に見える。ネ

クタイにワイヤーシャツのサラリーマンたちも。

ぼくは、自分がネクタイをしめ、しかめつ面で事務机に向かっているところを想像してみた。

誰だそりや。

大学の専攻は都市建築。だが自分で事務所でも開かない限り、宮仕えの身になるわけだ。いくつもの賞を総なめにするような大先生以外は、見物人の彼らと同じ、サラリーマンである。

写真はもちろん好きで、だから「いまこうしているのだが、将来新さんのようなプロになろうとか、なれるとかは思っていない。もちろん、撮影がはじまれば、たとえ雑用係でもレフ版もちでも夢中になる。しかし、彼ら「プロ」とはなにかが違うのだ。

ぼくは将来このままの道を進み、建築家になるのだろうか……？

そこまで考えて、苦い笑いがこみあげてきた。

ついさつき、ぼくは二年後にせまる就職について考えていた。

けれど、実際に職種を考えだと、「将来」などという、ひどくあいまいな時を思い浮かべている。大学生活の一年間など、あつというまに過ぎるだろう。入学した日すら、昨日のように思えるのだから。

高校で進路を決める際、ぼくの頭には建築の一文字しかなかつた。周囲のおとなには珍しがられたものだ。「しっかりしてる」。たしか、そんな風にもいわれた。

そしていま。

希望どおりの大学に進学し、趣味の写真をバイトにできてさえいる。このまま順調に大学のカリキュラムを消化して、建築家への道を歩むのか……？

あと一年ある。が、一年しかない。
確実に迫りくる「将来」。

自分たちを遠巻きにながめるワイヤーシャツの群れに向ひ、「それ
がこま、はつきりと見えてきた。

「ね、すこしは元気でた?」

「うふ……。いまから会つてくる」

わうわわやきあう声が、カウンターにすわるぼくの耳にも届いた。

「ありがとね、マリ」

「うつとうつしゃい」

彼女のおじけた口調に真っ赤に腫れた眼がすこし笑んで、夜風のなかへと消えていった。

「すみませんトオルさん。お騒がせしました」

カウンターの定位置につくなり、マリが謝る。

「なあに。よかつたね、彼女。元氣でたみたいで」

トオルさんはこつもの笑顔だ。

「ナリくんも」「めんね?」

わうわわとしきこさな頭がぼくの方にかたむいた。

「こや別に」

ぼろりと口からでた返事がそつけなさずめた気がして、ぼくはあわてて付け足した。

「いいのか？あの子。もう11時だし、今夜は雨かなり降つてるぞ」

「す闇の中で、白い顔がほころぶ。

「彼氏が迎えにくるから」

「わうか」

ふと、湿り気をおびた夜風が頬をなでた。
客のだれかが出て行つたらしく、入り口の扉がゆれている。
午後からふりだした雨は、あいかわらず音もなくふりつづいてい
るようで、ゆらゆら揺れる扉のむこうからその気配だけがカウンタ
ーの奥にすわるぼくらまで、忍びよつてくる。

「すこし驚いたけどな。あの子が泣き出した時こな」

ギネスをなめながらわうかと、マコがすこし笑つた。

「いつものように、いつもの場所で。トオルさんと世間話をして
いたら、マコがやつてきた。

「あの時」をのぞけばほんとにひとりでここに来る彼女が、友達ら
しき女の子をつれて、ぼくらにちょっと田であいさつしただけでテ
ーブルに座り込んだので、内心首をかしげていたのだ。
頭をくつづけるようにして囁きあう女子ふたり。

「一だつて、しゃうがないのよー。」

悲鳴のような声がして、片方が泣きだした。

彼女は、泣き伏す友人の前で、じっと待っていた。

周囲の客の目も気にせず、慰めるでもなく諭すでもなく、ただじつと、泣きやむのを待っていた。

「……仲直りできるといいけど」

眉をよせ、マリがため息とともにそう言った。

その口調ににじむなか、慈愛みたいなものを感じて、ぼくはすこし、意外だった。

あれは……いつだつたろう?まだコートの必要な寒い日だつた気がする。

ぼくらは今夜と同じような場面に遭遇したのだ。

二人組みの女の子たちがやってきて、入り口ちかくのテーブルに、寒そうに身をよせあつて座つた。

と。

片方が突然、泣き出したのだ。

ぼくらはその時も、カウンターに並んで座つていた。

「別れりやいいのに」

赤い液体をみたしたグラスをぼんやり揺らしていたマリが、ぽつりと呟いた。

「なんだつて?」

彼女は泣いてころすを、ひりひと横田でみた。

「人前で、なんであんな風に泣けるんだろう?もし彼氏の」とで泣いてこるので、別れればいいだけじゃない?」

やう不思議そつに問いかける瞳は、どこまでも澄んでいた……。

「『泣くべからざり別れりやい』。ナリジやなかつたつけ?」

ぱくの顔面に、マリは怪訝な表情を浮かべた。と、

「あれ?」

思に出したよつだ。田尻がすこし赤くなつてゐる。
彼女の狼狽に氣をよくして、ぱくはさらりと突っ込んだ。

「友達だからちがうつて?」

「それもあるけど」

「つむき、口元でこむく唇く。

「それも?ほかにも何かあるのか?」

しつこく突っ込みに、軽くぼくをこらんでいたマリだが、

「ナリくん。経験つて、すここのものなのよ

こだなり、そう宣言した。

「は？」

展開についてゆけない。

「知らないこということと、知っている。解っていることは、全然違うのよ。『経験』がすべてではないけれど、ある意味す」「ことなの」

いつの間にか彼女の前には赤い液体に満たされたグラスがあり、マリはそれをひとくち、口に含んだ。

「泣くくらいなら……。前はたしかに、そう思つてた。知らなかつたの。その時のわたしは、まだ知らなかつた」

もうひとつくち。

「……しうがないのよね。投げてるわけじゃないけど、本当にしようがないのよ。どんなに嫌なところがあつても、そのせいで彼が憎らしく思えて、それでも好きなんだもの。どれだけ泣いても、そんな自分がいやになつても、好きなんだもの」

彼女の声が、頭の中でだんだん大きくなってきた。

「好き」。

その言葉が、あの場面をぼくの前に引きずりだす。

煙のむこうの笑顔。

すかしたKOOの箱。

彼女の紅い唇……いま彼女の目の前にある液体のように赤い……

ぼくは急に喉の渴きをおぼえ、いそいでギネスを飲み干した。

「一で、いまは知ってるわけだ」

すこし喉が痛む。びつやひり感わざたりしこ。

「あの時よつけ」

透明な瞳がぼくを見返す。

今夜はそらせない。

「へへえ。マリも大人になつたもんだ。……やっぱり女は、男ができると変わるねえ」

茶化すような言葉がもれる。
誰をだ？

「男？」

マリが小首をかしげる。
いつの間にか、トオルさんがぼくらの前にきて、黙つてグラスを磨いていた。

寡黙なまなざしが頬にさわる。

「二ヶ月前、ここ」がえらく混んでた日があつたの？お前、入り口に一番ちかいテーブルに座つてたよな？ＫＯＯＬ煙草の男といつしょに

に

いつてしまった瞬間。マリが、ほほ笑んだ。

その場の自分の感情すべてがふつとんで、見ほれてしまつたぐら

いきれいに。

たぶん彼女は、自分が笑んでいることに気づいていないだらう。つづみこむよくな笑顔で、そおっと息をつく。田崎さん、

「田崎さん」

その男の名を、呼んだ。

心臓が、痙攣する。ぐりっと引き絞られていぐ。
息ができない。

「そつか……あのとき、ナリくんいたんだ。……声かけてくれれば良かつたのに」

彼女の笑顔が、ぼくを刺す。

人間は感情の動物だ。身体は感情に支配されている。
しかし例外もあるらしく、ガチガチに固まってしまったぼくの身体からでも、皮肉はもれた。

「馬に蹴られたくはないんでね」

笑う、マコ。

「田崎さんはそんなんじゃないよ」

紅い唇がひらめく。

「バイト先のひとでね。よく飲みに誘ってくれるの」

彼女の透明な瞳は、ぼくをみていない。そのままにしているのは、絶対にー。

「でもお前は、あの男が好きなんだろ？」

ばかやうひ。

自分を心の中で罵倒する。ここまでぼくらは、いろんな話をここまできたのに、ねたがいの異性関係についてだけは、話したことがない。

がなかつた。

話すなら、彼女と自分のこととしたかった。

「ねえナリくん？わたし、前に言つたよね」

「……何を？」

なにか思い出したのか、笑うマリ。

「なんだよ」

「不倫について」

「は？」

「読んで字の」とく、絶対にしちゃいけない事だって。妻子もちが、別の女と恋愛なんかしちゃいけないよね

「

喉がひりつく。

なにが言いたいんだ？

彼女はなにを言おうとしている？

「田崎さんにはね、同じ年の奥さんと小学生のお子さんがふたり、ちゃんといふの。でもねナリくん。妻子もむけにする所思いも、『不倫』になるのかな?」

「……は?」

「わたしだけなの。あのを好きなのは、わたしなの。不倫なんてだめ。絶対にしないと言つてたわたしが、あのを好きなの」

固まつたまま彼女をみかえすぼくに、無邪気に笑いかける、マリ。

「ね? 知るつてことは、すうこことでしょ?」

煙草なんてみるのもイヤ、不倫なんて絶対ありえないのわたしが、苦しけりや別れりやいいのこのわたしが、ヘビースモーカーで妻子もちのあの人を好きなの。

好きで好きでたまらなくつて、あの人の顔を思い出すだけにやけちゃつて。毎日毎日あの人のことばかり考えて。手も顔も声も、あの煙草の匂いも覚えて。

田崎さんてね、色がすぐ白いの。背が高くて。学校や街でそんな人とすれ違うでしょ? 絶対にその時間そこで会つわけないのに、一瞬ハツとして振り返つちやうの」

マリは白い頬を上気させて一気にそこまで話すと、ほつと息をはきだした。

「一なんで、こんなに好きなんだら?」

「……知るか」

無理してこたえる必要なんてなかつた。
彼女はぼくを、みてはいない。

そうだな、マリ。

知らないってことと、知つてゐるってことは、まったく違つ。

ぼくは彼女が好きだ。

それは、ぼくしか知らない。

彼女の目の前にいるぼくがいま、嫉妬で押しつぶされそうになつてゐるもの、ぼくしか知らない。

確かに知ることはすごいことだ。

でも良いことだとは、ぼくには言えない。

邪氣のない、めったに見ることのできない彼女の無垢な笑顔が、
ぼくは好きだ。
ぼくの気持ちを「知らない」からこそ、その笑顔があるのだとし
たら。

ぼくはかわりに、この痛みに耐えねばならないのか。

ぼくは今日、それを初めて、知つた。

「生きてゐるかい？」

トオルさんが田の前で手をひらひらと振っていた。

「……生きてますよ……」

ぼくはほんやつと笑つてみせた。

なんだか顔中の筋肉がこわばつてうまく動かせない。音がするんじゃないかと思つほど無理して顔を横にむけると、マリはいなかつた。

「なかなか酷だね。マリちゃんも」

片頬だけひきつりせて笑つたぼくの前に、やけに華奢なカクテルグラスがおされた。

注がれるピンクの液体。

「ひきしづりにね、つくれたくなつたんだ」

田で聞つたぼくに、いつもの笑顔でトオルさんがこたえた。ひとつくち。

「……にがい」

「でも後味は甘いだろ?」

返事のかわりにこもうひとくち。喉にひつかかるような、独特の感觸。

「つまいですね、これ。……知つてたんですね。トオルさん」
なにを意味するかは通じた。

「知つていたわけじゃないよ。……なんとなく、なんとなくね」

そうゆつたりとほほ笑むトオルさんが、いますぐ大人に思える。
トオルさんはまだ30半ばのはずだが、そんな年齢的なものではなく、「大人の領域」にいるひとつといつ余裕をその笑みから受けた。

「そんなに分りやすかつたかな……」

「そうじゃないよ」

つぶやきに、トオルさんがちいさく頭をふった。

「一種の職業病だね。

夜の7時に店をあけて、ぼくはそれから、一日中ここにいるんだ。
カクテルをつくる、時折お客さんと話をする。休みの日以外、ずっと
とやうしているわけだ。

ぼくの世界はいわば、ここだけだから。このちこさな店が、ぼく
と外との窓口になるんだ。新聞やテレビなんかじゃなく、直接の、
なまの繋がりのね。

ここでのぼくは主役ではなく、この棚に並んでいる酒の瓶と一緒に
で、舞台装置みたいなもんだよ。

長いことこんな仕事をやつているとね、自然と話をきいているだけ
で判つてくることもある。この人は奥さんとあんまりうまくいっ
てないな、とか。この二人は不倫しているのかな、とか」

そこでトオルさんはすこし言葉をきり、

「他のお姉さんには内緒だよ。ほとんどはこんな風に詮索しちゃいけないんだから」

片頬だけで笑つてみせた。

「酒のある空間って、一種独特なものだと思わないか? どこか秘密めいた香りが、ここには漂つているとおもう。ひとはそこで、ほんのすこしだけ生の感情をみせる。酒の力と空間の魔力を借りてね。ぼくはそれを、時折垣間見ているだけだよ」

グラスを磨きながらそつ話すトオルさんは、珍しく饒舌だった。慰めてくれているのだろうか。どうやらそれほど情けない顔をぼくはしてこないらしい。

舞台装置。脇に徹する、か。

この人もまたプロなのだ。自分の役割をきちんと見極め、動いている。

彼からみればぼくなぞ、まだほんのひよっこなのだらつ……。いっぽしの大人ぶつて酒など飲んでこるけれど、女の子のことでは愛なくおちこむガキだ。

ぼくはすこしづかり自虐的になつて、カクテルののこりを一気に飲み干した。

「酒はおいしく飲むもんだよ」

兄貴みたいな表情で、トオルさんがぼくをみている。

「苦い酒だつてありますよ。まあい酒だつてあるでしょ?」

つい突つかかつてしまつた。
と。

「まよい酒がひびいたの？」

「これからマリがひょいと顔をだして、無邪氣にわいつたずねてき
た。」

「天候によつて葡萄酒はできを左右されるねつて言つてたんだよ、
マリちゃん」

さつ氣なさすぎるフォロー。

ああ、自分がさりに情けなくなつてきた。

「ふ～ん……。今年も暑いから、出来がいいでしょうね」

マリは素直に感じている。

「さて。秋の天気は変わりやすいからね

「あ、女心もつて顔ですね」

おおきな目をくづくと動かして、マリが睨むふりをした。

トオルさんはそれを笑顔で受け流して、テーブル席のほうに呼ば
れていった。

「……あれ？珍しいね。カクテル飲んでる

マリが小首をかしげてぼくの前のショットグラスをみつめた。

「なに？これ

「知らん。トオルさんがくれた」

グラスの底に、ほんの少しだけ淡いピンク色が残っていた。

「飲んでもいい？」

「どうぞ」

マリは、肩をすくめたぼくに会釈でもするようにグラスをうつとあげてみせ、思い切りよくひと息でのんだ。

「 知ってる。これ」

余韻を確かめるように喉にふれながら、つぶやく。

「へえ？」

「リリー・マルレーーン……と思つ

「女の名前か」

いつもギネスピールばかり飲んでいるが、カクテルにも結構詳しいと、自分ではおもつていて。

彼女がいつも飲む「ブラッディ・マリー」など、ひとの名がついたカクテルは多々あれど、それははじめて聞く名だった。

「カクテルをつくった人の、恋人の名前なんだって」「花のかわりにカクテルをつて？」

くさいなと笑うぼくに、マリは首をふつてみせた。

「ちょっと違う。このカクテルをつくったバーテンダーには恋人の

がいて。結婚の約束もしてたんだけど、彼女は亡くなってしまったんだって。天国の恋人に贈ろうとしたんだよ、その人」

ひとり残されたバー・テンドー。

彼にできた唯一のことは、恋人の名のカクテルをつくることだったのか。

なんにも遺さなかつた彼女のかわりに、彼が残したのか……。ふと、マリとおなじような会話をしたこと、「ぼくは思い出した。

『どうせ忘れられるなら、最初からなにも残さないほうがいい

でも……のこされた者は?

記憶さえも消してくれと言われたものは、どうすればよいのだろう。彼女をおもいだすよですがとなるものは、なにも、どこにもない。墓さえない。

あまりにも切ないじゃないか。

彼女が本当は忘れないでと願うように、のこされた人々も、忘れたくないと願うはずだ。

「せつないじゃないか」

知らずもれた咳きに、マリがこくりとうなずいた。

……じゃあなんでお前はそう言つんだよ?

「そのバーテンダーにはなにもなかつたから、そのカクテルをつくつたんだ。彼女とのものが、何もなかつたから」

慎重に言葉を選んだつもりだったが、彼女は納得しなかったようだ。

「そうかな？」

小首をかしげてぼくを見る。

「なにかしたかったけど、もう彼女はいないから、何もできなくて。でも、『何か』自分の手でやりたかったんだよ。思い出のためか、忘れないためか。だからこのカクテルを作ったんだと思つ」

あいつと一蹴されてしまった。

それはすべて彼自身のため。彼女の為じゃない。ふたりの為ではないのよ。

ぼくを見返す透明な瞳が、そう断言している。

うまい言葉がみづからず、ぼくは押し黙るしかなかつた。

その間にマリは、カウンターにかえってきたトオルさんいオーダーしている。

「リリー・マルーン、お願ひします」

眉をほんの少しあげ、驚いた表情のトオルさん。それでもいつも笑顔で応じる。

「マリちゃん。知つてたんだ、このカクテル」

ぼくと、ぼくの前の、空になつたグラスをみくらべる。

「一度だけ飲んだことがあるんですよ」

軽快な音とともにあざやかな手つきでカクテルが作られ、彼女の
顔を濡らした。

「の、ワニには、誕生秘話までよく知つてたな

紅い唇に、目が奪われる。

そして、ぼくにあの夜を思い出させる。

「田崎さんが、教えてくれた」

煙の向ひの、あの笑顔。

「大好きなひとと、最初に飲んだお酒なんだって

こまほくに向けられてるのさ、哀しそうな微笑みだけ。

今夜はもうだめだ。

夏の雨が、とんでもないものを運んできた。
いや。真実を見せつけてくれたのだろうか。

ああもうこい。もうこいよ。
彼女の瞳はぼくのものじゃない。その顔もぼくのものじゃない。
い。ぼくには向かってない。

すべて、すべて「田崎さん」のものなんだろ？
気づかないうち、声をあげて笑っていたらしく。マリが田を見
開いてきてきた。

「どうしたの？突然笑いだしちゃって」

喉をクツクツと鳴らして笑い続けながら、ぼくは彼女を真正面でみつめた。

「なあ。そんなに『田崎さん』が、好きなのか

あいりとか、マリは瞬時に耳まで赤くなつた。

「なに言つて……」

「オイオイ、あれだけ自分で連呼しどきながら、なんで赤くなるんだ？」

「こちなりつ……聞いてくるから…………」

田をそらして、口のなかでなにやら「じょよ」と呟いていた。その妙にシャイな反応に勢いを得て、ぼくはせりた続けた。

「あれだけ熱烈な愛の告白をしてくれたじゃないか。ひとから聞かれるのは恥ずかしいとでも言つのかよ」

耳だけでなく、首筋までが朱になまつている。

「…………うん」

「まあいいじゃないか。恥ずかしいでに、ふたりの馴れ初めでもきかせてくれよ」

「…………ナリくん……酔つてるでしょ」「ひさしひぶりにカクテルなんて飲んだから」

真っ赤な顔のまま、マリがぼくを軽くにじらむ。

「酔つてもなんでもいいから。まあ話せよ」

重ねるぼくに、彼女はため息ひとつ。

「ナリくんが酔つてると云ふ、ひしゃぶりに見たなあ……。そとの天氣も変だけど、今夜のナリくんも変だね」

その言葉に、ぼくはピタリと笑つのをやめた。

言つてしまおうか。

あまりにも遅すぎて、陳腐なだけだけれど、言つてしまおうか。

「……たしかに、今夜は変だわな」

でもぼくがその続きを言つまえに、彼女が口を開いてしまった。

「あれは……いつだつたかなあ……」

雨は、まだ降つづづくよ。だつづづくよ。

「あの子、ひょっとでしゃばつじやない?」

話し声に、扉にかけた手がとまつた。

閉店後の片付けも無事終え、着替えよりマリは更衣室に来ていた。

「わたしが注文とるじゃない? それで料理がでてくるの待つてたら、あの子がさつさと持つてつちゅうのよ」

中から聞こえてくるのは、バイトの先輩である、タ美子のようだ。

「気をつかつてるんじゃない?」

「」の優しい声は、おなじく先輩の、タ美子とこひばん仲がよそぞうな薰のものだらう。

マリは、扉の前で足をとめたまましばし迷った。
中のふたりはどうやら、だれかに対する批評、とこつよつは陰口をいつてこるようだ。

漏れきこえる言葉から、おもにタ美子が文句をいい、薰がフォローしているように聞こえる。いま中にはいれば、話を聞いていたのがふたりに知られてしまつ。やはりそれはまずいだらう。

「もうお~? そんな風には見えないけどー?」

タ美子の口調にはかなりの刺がある。

「あの子」ってだれだろう？

アルバイト先のレストラン「ANAIS」には、現在マリをふくめて10人のバイトがいる。男女は半々。

夕美子と薰はもう3年目になるベテランの先輩たちで、マリも彼女たちに仕事のいろはを仕込まれた。特に夕美子とはシフトがかぶることも多く、その仕事ぶりと明るいカラっとした姉御肌の人柄を、マリは慕っていた。

その夕美子が陰口をたたいている現場にいあわせてしまい、マリはすくなくからず驚いていた。

「そんな言い方しないの」

薰のやんわりと諭す声がする。

彼女は、どんなに店が忙しくてもそうしているように、ゆつたりとした微笑をそのちいさな顔に浮かべてことだらけ。

「マリちゃんは、まだ慣れていないから頑張りすぎちゃうのよ、きっと。その内ペース配分を覚えるわよ。だって、彼女がうちに来てからまだ2ヶ月じゃない」

いま、たしかに薰は自分の名をいった。

マリは、扉からゆづくじと後ずさった。

「じゃあなんで、2ヶ月しかたってない新人がチーフになれるのよ？仕事を覚えるのはわりと早かったけど、まだまだトロイといろいろあ

「……じゃない。店舗にでも媚売ったに決まっているわ

足がうまく動かない。

言葉が、つぶてのようになんでくる。

「だいだい私、最初からあの子との事好きじゃなかつたのよね」

マリは扉をみつめたままじつじつと後ずさる。

やめて、やめて。

扉が開きかけた気がして、弾かれたよつて避けだしました。
まるでその場から逃げだすよつて。

「 つと失礼…………なんだ、中井さんか」

声とともに、田の前の丘に壁がひょことわきこぼれた。

「 ……田舎さん ……」

薄暗い廊下。田にまあるい笑顔が、だいぶ上のまつに浮かんでいる。

「 ……どうした? いつもの元気がないなあ。彼氏と喧嘩でもしたか

？」

ひとつだけの乾いた笑い声が、廊下に響いた。

田崎が、眉をよせてマリの顔をのぞきこむ。

「どうした？」

背の高い、色白で柔軟な印象をうつるこの男 田崎とは、ひょんなことから親しくなり、会えば立ち話をする仲だった。

仕事で直接付き合いがあるわけではないが、店長のお使いでマリはちょくちょく、田崎が所長をつとめる管理事務所に行っている。32歳で所長。しかし、その役職を感じさせない柔軟な笑顔の彼は所内外で人気があるらしい。「義理」にはどう見てもおもえない気合の入ったチョコレートの受け渡し現場に居合わせたことがあり、苦笑とともにお裾わけしてもらつたことがある。

外見からはまだ20代にしか見えない田崎に、マリも好感を持つていた。

「どうしたんだ？」

なんで、子供に聞いてるみたいに囁くの。

うつむき、マリはつぶやいた。

ずっと走っていたせいで、心臓の音がうるさい。深呼吸をひとつして、いつものように笑顔でー

「中井……さん？」

田崎のやわらかく詠められた日が、おおきく見開かれた。

「…………何があった？」

頬がむずかしいと思つたら、涙がつたつていた。

マリは、奥歯をぎゅっとかみしめ、いそいで横をむいた。

涙など見せたくない。たかがバイト先で陰口をたたかれただけじゃないか。

マリは、公私といつまでもおおげさなものではないが、バイトとの他の生活をかなり明確にわけていた。いくら親しくなったとはいえ、仕事でかかわりのある他人に、自分の生の感情をみせるのは嫌だった。

ほんとうならこのまま走つて逃げたい。

しかし、それでは田崎が気にするだろ。これからも彼とここで顔をあわせるだらうし、気まずい思いはしたくない。

そう思つとマリは、根がはえたようにそこから動けなかつた。ただ黙つて横をむき、泣いているしかできなかつた。

ちいさい頃から、悲しい時よりも怒つた時、悔しい時に涙がでてきた。

いま心にうずまく感情がなにかはわからないうが、マリは、全身で拒絶をあらわすように横を向いたまま、ただじつと立つていた。

「…………今日、残業だつたんだよ」

「…………え？」

妙に明るい田崎の声がふつてきて、マリは思わず彼をみあげた。

「事務所の人間はみんな帰つたのにさ、ぼくひとりでこんな時間ま

で仕事してゐるんだよ

いぶかしげなマリの表情などまつたく氣にせず、どうでも明るい田崎。

彼独特の、まるい笑顔。

「だから、かわいそうな僕と、一杯だけつきあつてよ

いつの間にか涙はつまっていた。

しかし、恥ずかしくてマリはなにも言えない。

「じゃ、下で待つてるから

そう言つて置くと、やつと田崎は行つてしまつた。
しまへりませんやつとその広い背中を見送つてたマリだが、

「田崎さんが待つてるから

勢いよく更衣室へ駆け戻つていった。

「いくつで所長になつたんですか？」
「コントラバスの低いうなりが身体にしみる。

カウンターにマリと並んで座る田崎は、誰かさんとおなじく、ギネスビールを飲んでいる。

マリたちのショッピングモールからそう遠くないところに、田崎の「隠れ家」はあった。

バーにしては広めの店内に、ぽつりぽつりと客がいた。

マリがよく行く「トオルさんの店」は、黒を基調とした装飾の、なんとなくニューヨークあたりにありそうなスタイリッシュな内装のバーだ。

田崎が連れて来てくれた店は対症的に、飴色のカウンターにがつしりとしたつくりつけの棚。照明も、トオルさんの店の極限までおとしたものとは違い、木の温もりを味あわえ、隣り合う他人の顔を見てらす程度には、明るい。

おいしい珈琲の店。そんな感じだった。

「所長になつたのは、去年の秋だ」

この人も、ギネスをおいしそうに飲む。

マリは、田崎がかたむけるグラスと、それを握る大きな白い手を漫然とみていた。

「え？」

「去年の秋だよ。前所長が突然でてこなくなつてね。他になり手がないなかつたんだろう

ゆつくりと、笑う。

本当にそう思つているのか、謙そんしているだけなのか。その笑

顔からは推し量れない。

「31だつたな」

弦の低いうなりが、一定の大きさでずっと響いていた。それがなんの曲なのか、マリには分からなかった。

田の前の赤い液体をみつめ、しばし迷つてから、マリは口を開いた。

「田崎さんは……その時、なにか言われませんでしたか？……周りのひとから」

弦の音に聴きこむように田を開じていた田崎は、ゆっくりとそのままをひらいてマツを見返した。

「何かつて？」

「たとえば……若すぎる、とか」

くすぐりと、田崎が笑つ。

「たしかそんな映画があったな。さて……あつたかな。辞令がありました時、すこし驚かれてはいたね。部下になる所長補佐は、僕より10以上、年上だったし。同僚にて、上司の腰ヤンチャク呼ばわりされたこともあつたかな」

くやしいとかの感情とは無縁の表情で、淡々と続ける。

「僕自身驚いたしね。当然の反応だらう。なにか特別、会社に貢献した覚えもなかつたし。本部の部長や専務に取り入った覚えもなかつたしね」

そこではじめてそのすつきりとした右頬に、皮肉な笑みが刻まれた。

「田崎さんが。田崎さんが所長になつたのは、能力を認められたからでしょう？それなのに……陰口なんかいうひとは、卑怯じゃないですか」

カチンッ

マリが、言葉とともに投げ出すようにして置いたグラスが、鳴つた。

田崎はまだ微笑んで彼女をみている。

「自分ができなかつたから、だから嫉妬して、けなしているだけじゃないですか」

言いつのねづかに、腹のそこからむりむりと怒りが込み上げてきた。

そう。マリは今日、バイト生活三ヵ月にして「チーフ」になつた。チーフとは、その時間帯にはいるバイトたちのまとめ役で、店長や社員がない時にはレジを任される。バイトの一番上はリーダーと呼ばれる位置だが、チーフはその下にあたる。

閉店後、店長に昇格を告げられ、かなり驚きはしたもののやはりうれしかつた。バイトをはじめてこの2ヵ月、メニューを頭にたたきこみ、バイト帰りのくたくたの身体で眠い目をこすりながら、イタリア料理の本を読むなどして勉強していたことが、報われたと思ったのだ。

バイト先のレストラン「ANAIS」では、バイトであるうと料

理やワインについて詳しい人がほとんどで、バイトから社員になつた先輩も多い。テーブルマナーがどうのという堅苦しい店ではないが、やはり料理を運ぶさい、お客様にお出しする際の立ち位置や言葉づかい、声のかけかたまで指導された。

ひとによつて教えてくれることが微妙に違つたり、メニューの説明ができず恥ずかしい思いをしたことがあつたりと、なかなかにキツイ2カ月を送つて、この頃やつと一人前になれたのではと、思えてきたのだ。

現に、先輩の夕美子も今夜の人波が一段落した時、

「慣れてきたじゃない。その調子よ！」

そう、言つてくれていたではないか。
それなのに

「だれかが努力したことや何かで報われたと時に誹謗する人はひどい。しかも……陰で言つなんて……するいじやないです……」

悔しくて、また涙が浮かんでくる。
マリは慌てて皿をしばたいた。

田崎はさきほどからずっとおなじ笑顔のままマリをみていた
が、

「バイト先で、なにか言われたのか」

質問というよりも確認するように言つた。
黙つて唇をかむ、マリ。

「人と違えば、それだけ注目されるし、なにか言われることも多く

なる。言われることが良い時もあれば、悪い時もあるや」

「なんでつ……なんで陰で言つんですか。うわべでは優しい」と言ひ、「こ、裏で……」

田崎に言つてもしようがないと分かつていながら、言葉が、悔しさがあとからあとからあふれてきた。

夕美子のほめ言葉に得意になつていた自分が、恥ずかしいとも思う。はたで見ていれば、さぞかし滑稽だつたろう。

「なにかが欲しくて、それを田指して一生懸命やつて……。それは、いけないことなんですか？待たなきやだめなんですか？まだ早いから？できるだけ控えめにしてなきやいけないの？」

それが……ひとの上に立つことが目的じゃなかつたのに……自分でやつてみて、認めてくれたと思つて……つれしかつたのに

「

頬をつたう涙が、ぽとりと音をたてて手の甲に落ちた。マリは、ぎゅっと唇をひきむすんだ。

だからお前はいつも、唇があかいんだ。

悔しいとき、怒ったときいつも唇をかむマリをみて、いつだかナリヒラがそつからかつた。

田崎は　　グラスに残つていたギネスをゆつくりと飲み干し、マリの話を聞いているのかいないのか。あいかわらず低く流れている弦の音色に聞き惚れているかの」とく田を開じ、その口元は笑んでいるよつにもみえた。

そんな田崎の横顔にちらりと田をせつ、マリはひとつ、ため息を

ついた。

「すみません。田崎さんによると、いつでも……しかたありませんね」

その言葉に答えたのか、ちこちく笑う。

「この人は、なぜ、何を思つて誘つてくれたのだろう？」

マコの頭にふと、そんな疑問が浮かんできた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6097s/>

彼女

2011年11月20日03時11分発行